

豊後国田染荘の景観変遷

——中世莊園村落景観への接近にむけて——

出田 和久

一 はじめに

昭和三八年（一九六三）に団体営圃場整備事業が開始され四半世紀が経過し、圃場整備事業は地方の小山間盆地にも波及してきている。圃場整備の実施は、農村の経済的基盤である水田の形状を大きく変えるだけでなく、道路の付替え、用排水分離、水田土壌の変化などをともなう。耕地一筆の面積が大きくなると、小地名が消失し、農業機械の導入が進むと、農業労働に関する慣行にも変化を生じることとなる。今日こうして農村景観は急速にかつ大きく変貌しつつある。最近までの村落景観の原型は、一般には近世中期に形成されたと考えられていることからすれば^①、今日をのがすと近世前期、さらには中世・古代の村落景観の復原は今後ますます困難となるといえよう。

さて、過去の村落景観という具体的な像を復原しようとする、一般に時代を遡れば遡るほど難しくなり、中世ともなるとその困難の度はいつそう高まる。それは史・資料が時の経過とともに失われ、少なくなるからである。これまでに中世村落の景観復原に関して歴史地理学はもとより、歴史学からも多くの成果が蓄積されている^②。これら

の研究の多くは、奈良盆地などのように条里地割と地名がよく残り、文献史料との照合が可能で、いわば条里地割の中に村落景観の復原を行なったものと、薩摩国人来院や備後国太田庄、下総国香取社領村落の場合にみられるように、条里地割と結びついた復原ができない山間部や谷あいの谷戸田（谷津田・迫田）の卓越する地域での村落景観の復原を行なったものと大きく二分できよう。前者のような場合は面的に景観を捉えることが比較的容易であるが、後者のような場合はかなり困難で、ややもすれば点的とならざるを得ない。そのかぎりにおいて、具体的な景観として像を結びにくいといつてよいであろう。小稿で取り上げる田染盆地の景観復原は後者とほぼ同様の方法によるが、共同研究により地域的には相当網羅的に地籍図・地名・灌漑・信仰・考古資料等に関して調査することができ、かなり面的な把握が可能となったのではないかと考えられる。さきに筆者は近世村絵図と地籍図を主に利用して田染盆地の近世における村落景観の復原を行ない、ややもすれば単純に現代の村落の延長上に考えがちな近世村落の景観を具体的に描出しようと試みた^③。そこで、小稿では、これに、これまでの共同研究の成果を加え、まず、古代の田染盆地の景観を描き出し、次に近世の村落景観をみた後に中世の田染荘の村落景観をみることにしたい。

二 豊後国田染荘の概要

大分県豊後高田市田染地区は、六郷満山の仏教文化で知られる国東半島の南西部に位置し、両子山（七二一メートル）の放射谷に源を発する桂川中流域の、小山間盆地である田染盆地を中心とする地域である。古代には『和名抄』にみえる国埴郡六郷のひとつ田染郷の地であったと考えられ、盆地底には小規模ながら条里型地割がみられたが、昭和五八年度以降の県営圃場整備事業の進展によりその姿を消しつつある。

豊後国田染荘に関しては多数の關係史料が残存している^①が、田染荘成立の経緯に関しては不明の点が多い。田染荘の文献上の初見は長寛三年（一一六五）の「関白藤原基實家政所下文」^②で、この時点ですでに宇佐宮領田染荘となっており、鎌倉時代前半成立とされる「八幡宇佐宮御神領大鏡」^③によれば、豊後国では石垣荘とともに本御荘一八箇所に加えられ、宇佐宮領荘園の中でも重要な地位を占めている。しかし、同文書には「田染庄四至田数 佃 一丁 用作田四丁一段」とあるだけであるが、弘安八年（一二八五）の「豊後国大田文案」^④には

田染郷九十町 宇佐宮領

領主

本郷四拾町

大藏卿法眼有寛跡、小田原又次郎景春法師、法名寂仏、相傳之由申之、

吉丸名貳拾町

名越尾張入道殿

地頭

糸永名參拾町

肥前國御家人曾弥崎淡路法橋慶増

とみえ、田染郷は大きく三つにわかれていたことが分る。

のち、武家勢力の浸透により、室町後期には大友氏の守護領国下の荘園となった。近世には慶長五年（一六〇〇）豊前中津（のち小倉）藩細川氏領、寛永九年（一六三二）豊前竜王（のち高田）藩松平氏領、正保二年（一六四五）幕府領となった^⑤が、寛文九年（一六六九）以降は概ね松平氏の島原藩領であった。田染地区の横嶺、小崎、中、間戸、真木、陽平、蘭木、田野口、熊野、大曲、観音堂、上野、相原、池部、落各村のほか、下杓掛、一畑、梅木、加礼川、新城の四村を加え、田染組二〇ヶ村を構成し、明治時代を迎える（図1）。

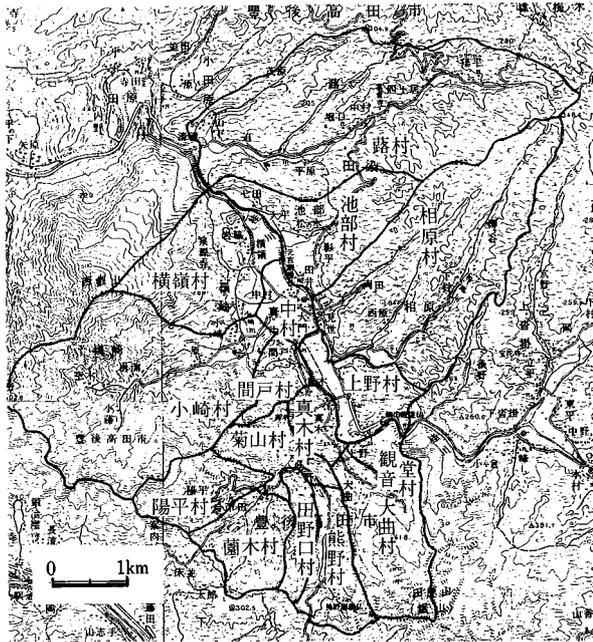


図1 田染盆地内の田染組各村の位置
〔50,000分の1地形図 鶴川・豊後杵築・宇佐・豊岡〕

らかではないが、中期の遺跡数が非常に減少する⑧が、この動きと整合的である。いずれにせよ、縄文時代の早期の段階からこのような山間部の小盆地が、エクメネーとして利用されていたことを示している。後期になると周辺の丘陵部から盆地底の自然堤防上に居住の中心を移している。

盆地中央部、大字真中の桂川左岸の自然堤防上に位置する戸原台遺跡では、縄文時代から古墳時代、さらに中世の

三 古代の田染盆地の開発と景観

(一) 遺跡分布からみた開発の進展⑨(図2)

田染盆地の南西部桂川の支流小崎川流域丘陵上と、盆地底の桂川右岸の自然堤防上に縄文時代の遺跡が分布する。前者の地域には縄文時代早期、前期初頭を中心に、後者の地域には後期、晩期に断続的に遺跡が存在していた。野地台遺跡では姫島産の黒耀石の石鏃が多数採集されており、縄文時代早・前期における石材の流通の一端を示している。このようにみとくると、田染盆地では明確に縄文時代中期とされる遺跡が確認されていないことに気付く。これは、大分県では九州東南部⑩と同様に、理由は明

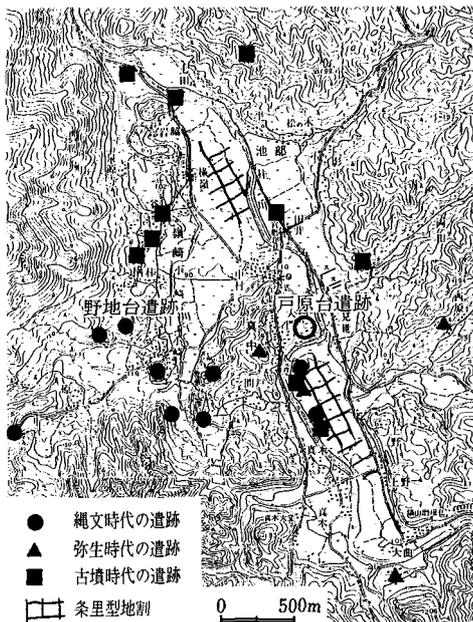


図2 遺跡と条里型地割の分布
(25,000分の1地形図 両子山・若宮)

遺物が散布する。弥生時代の遺物は広範囲に分布し、土器・石器（石斧・石鏃）・紡錘車など種類も多様で、田染盆地内では他に有力な弥生時代の遺跡は知られていないことから、田染盆地における母村的集落ではなかったかと考えられる。弥生時代には、居住地はこの戸原台遺跡を中心に南側の桂川右岸の自然堤防上や周辺部の丘陵端部や小支谷へと拡大していったようである。右岸の大字上野字市場の南部の桂川に沿った自然堤防にあたる部分からは、弥生時代終末期～古墳時代前期の住居址が検出されている^⑤。この背後の後背湿地での水稲栽培を、漁

撈・狩猟とともにこの集落の生産基盤とみることができよう。しかし、その後の時期の遺物は量的にも少なくなるよううで、削平されたり、盆地底の開発が必ずしも順調ではなかったことなどが考えられている^⑥。

(二) 条里型地割と盆地底の開発

盆地の底部には北部に幅三町、長さ五・六町、間に標高一三〇メートル余の小山塊を挟んで、南部に幅三町、長さ七・八町にわたって条里型地割の分布がみられる(図2)。両者は約三〇度西偏し、五〇〇分の一の地図上では、南の旧観音堂村の背後の標高二一・一メートルの山と旧中村の標高一三〇メートルの山を挟んで、北の旧落・相原村境の

一六一メートルの標高点のある山とを見通した線を基準線として設定されたとみることができるともなう大字上野での発掘調査によると、この条里型地割は、八世紀後半から中世の間に施されたことが推定されている¹⁵。ここでの調査では、旧地形の復原にも注意が払われ、条里型地割分布地区での低湿地のひろがり把握され、前述の古墳時代の集落はこの条里型地割の施工により、微高地が削られ耕地となるのにもなつて、盆地底東部の丘陵裾部に移動したと考えられている¹⁶。この条里型地割を古代の条里施行にともなうものと考ええると、田染盆地における水田の耕作は、後背湿地を中心とした弥生時代から古墳時代、古代の条里施行期、中世の莊園による開発、さらに近世の開発と大きく四段階に分けて考えることができる。このなかでも条里による開発は、耕地を最大限に確保するために集落の移動をとめない、盆地における集落のありようを一変させ、田染盆地の景観を大きく変えた。盆地の景観へのインパクトという点では、今日のモーターリゼーションや圃場整備よりも大きなものがあつたといつても過言ではないだろう。

元来、田染盆地は他の国東半島の地域と同様に、溜池や井堰の多いことでも分かるように、年間降水量はそう多くなく、大きくは瀬戸内海気候区に属するが、冬季には北西ないし西よりの季節風が入り込み曇天が多く、この点から準日本海型気候区に分類される¹⁷。用水の恒常的不足は、田染地域で広範囲にわたる雨乞神事がみられることでも容易に推察できよう¹⁸。したがって、このような条里にともなう開発には、当然用水をいかに確保するかという問題を惹起する。そこで、発掘調査ではいま一つ条里型地割の施工時期が絞り込めなかつたが、用水のありかたを徴証として、もう少し時期を限定することも可能であろう。条里型地割のある地域の用水は、南部の上野地区は大字上野字高取の鍋山磨崖仏下の桂川本流の鍋山井堰から、北部の横嶺地区は大字真中字大平と大字上野字市場の間にある桂川本

流の大井手井堰から取水し、灌漑している。盆地底における最も基本的かつ重要な井堰であるといえる。前者は桂川が盆地に出てきた河川勾配の変換点にあたり、しかも河床に岩盤が露出し段差の生じている所に設置され、巧みな位置を占め、古代における農業技術の水準から考えても比較的引水は容易ではなかったかと思われる。鍋山井堰あるいはその前身となるべき井堰的なものが古代につくられたとすれば、そのような施設を必要とする農業用水の需要増加を引き起こすような事情が惹起されたと考えてよいのではなからうか。そして、その事情というのがこの盆地底桂川右岸における条里地割の施工ではなかったかと推測されるのである。これに対して後者は、桂川の水面と水田面の比高が三メートル前後あることから一キロメートル足らず上流に設置され取水している。前述のように横嶺地区と上野地区の条里型地割が同一基準線にのるとみられることから、両地区の地割はほぼ同時期に施工されたと考えるのが自然であろう。また、前者と比べると用水路が若干長くなるが、古代においても、この程度の距離の引水は技術的にはそれほど困難をとまなうものでもなかったであろう。この古代に条里地割の施された部分が前掲の弘安八年の「豊後国大田文案」の「本郷四十町」に概ね相当するものであろうし、田染郷の中心であったであろう。

このように盆地底は、古代に開発が進行していたと考えられるが、古墳時代の遺跡分布からみると、周辺部では大字嶺崎の小崎川下流左岸あたりが比較的早くから開かれていたくらいである。

四 近世の村落景観¹⁸⁾

(一) 近代初頭の村落景観とその変化——地籍図との比較から

高度経済成長のなかで、山間の農村部では都市への人口の大量流出がみられ、深刻な労働力不足に見舞われ、それ

までに祖先たちが、営々として切り開いてきた山地・丘陵地斜面の耕地（棚田や段々畑）の耕作を放棄し、杉などの植林地に切り替えざるを得なくなり、土地利用景観に大きな変化が生じた。さらに、今日のようなモータリゼーションの進展も道路の付け替えをはじめとして村落の景観にも大きな変容をもたらした。そのため、現在の村落景観からは、もはや近代初頭の景観さえ想像するのが困難になってきている。近世の村落景観ともなると、その困難はいっそうつのである。

わが国の村落景観の原型は、一般的に近世中期に形成されたとの見解もあり^⑩、近年の大きな変貌を遂げる以前の村落景観を確実に把握することは、近世の村落景観を考える上で非常に重要なことであろう。このように考えると、明治中期に作成されて現在も広範に残っている地籍図は重要な資料といえる。田染地区についてみれば、明治二一・二二年に作成された地籍図が、ほとんど無修正で作成された当時のままに「正本」として大分地方務局豊後高田支局に保存されている。一字一枚、縮尺は一分一間（六〇〇分の一）を基本としているが、山地部の広い字では数葉に分割されていたり、縮尺の小さいものがみられる。

ここでは田染盆地の中心である盆地底の中村^⑪、条里型地割のみられる上野村、盆地周辺の桂川支流の谷と山地に位置する観音堂・大曲両村、さらに桂川の支流小崎川の流域にあり中世に田染氏の居館が存在したとみられ、両者の中間的な位置にある小崎村について、近代初頭の村落景観とその変化をみることにしたい。

中村には本宮八幡宮があり、本宮の北には近世田染組大庄屋河野氏の屋敷跡があり、村名からもうかがえるように古くから田染盆地の中心であった。現在、この本宮八幡宮に隣接して豊後高田市田染支所、田染郵便局がある。明治三六年に県道豊後高田・杵築線が村内を斜めに縦断したが、そのためか、県道に近い字大門の北部に集落が展開する

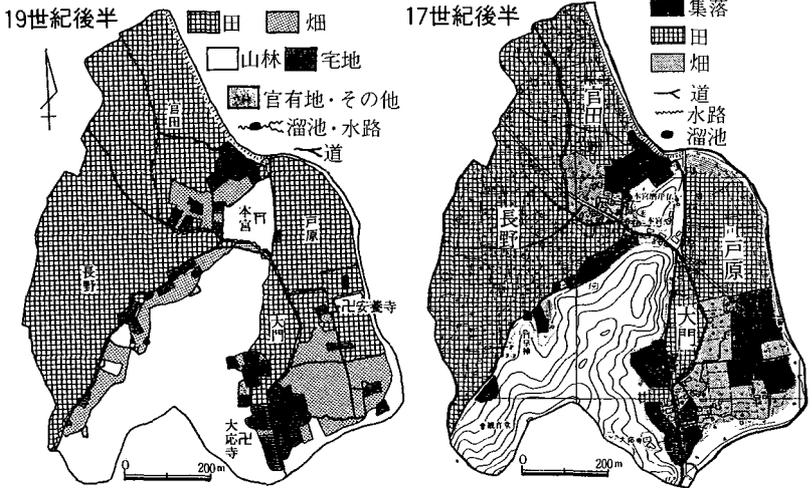


図3 中村の村落景観変化（『豊後国田染荘の調査 I』による）

という現象がみられた。また、字長野の南部の小集落が近代になって姿を消している。さらに、地籍図では、中央部の小山塊の西斜面下部で畑がかなり広がっているが、現在ではごく一部だけになっている（図3）。

桂川を挟んでこの中村の東南に接する上野村では、明治初期に字大山から山あいを通り東隣りの杵掛村に至る道が廃され、現在の県道豊後高田・杵築線へと変更されている。桂川沿いの字コブシや字西ノ尻・園田にある集落は規模の縮小が顕著で、前者は大正期に至って廃絶し、現在その跡地は畑となっている。これに対して、県道沿いの集落は規模の拡大がみられる。字平原などの丘陵部にみられた畑地の減少も目立った変化である。

田染盆地南端部、田原山（鋸山 五四二メートル）に源を発する大曲川の谷筋に大曲村・観音堂村の二村が位置する。大曲川は観音堂村の北西部で桂川に合し、観音堂村は桂川左岸沿いの比高二〇～二五メートルの台地を中心に広がる。ここでは山地斜面における畑の減少と集落全体の縮小傾向がみられる。

小崎村は小崎川の上流部と下流部とはかなり様相を異にす

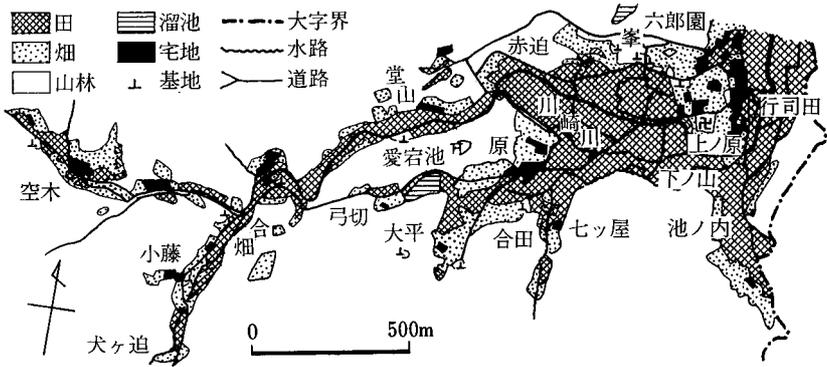


図4 旧小崎村主要部の近代初頭の景観
 (『豊後国田染荘の近世村落景観』(『人文地理学の視園』所収)による)

る。近代以降に大きな変化がみられるのは主として上流部である。愛宕池の奥の字弓切と小藤の谷の入口の字合畑にあった二つの小集落が姿を消し、愛宕池の南の字大平にあった小集落は第二次世界大戦後に字原と七ツ屋に移転したという。現在はみられないが、地籍図では緩斜面にかなりの畑がみられ、近代以降の耕作放棄地のひろいことがわかる。

これらには実際に山中をあるいてみると、所々に地面を平坦にならし、一部には石垣を積んだ跡もみられ、かつて田や畑であったことが分かることも多い。小藤の谷は現在よりもかなり奥まで田や畑が開かれていたようである(図4)。

(二) 近世の村落景観とその変化——村絵図と地籍図の比較を中心に

(1) 村絵図の性格 近世田染組二〇カ村のうち一六カ村が田染盆地に

位置し、そのうち一四カ村について近世の村絵図が残存している²⁾。これらの村絵図は、村明細書とともに天保七年(一八三六)に書き写されたもので、その奥書によれば、原本は元禄二年(一六八九)に島原藩役所に差し出されたもので、天保七年になって、その後の村の様子に変化があれば、掛紙を付して差し出すようにと一旦各村に返された。村にはこの絵図の控えがなかったので、その機会に絵図を写し取ったというものである。

天保三年に高田往還「清滝道」に近道のできた横嶺・小田原両村以外は、元禄年中から変化がなかったという。この村絵図と明細書の記載内容の検討結果によれば、この村絵図は元禄二年の状況を描いているといえる²⁰。

(2) 近世前期の村落景観とその変化——耕地と集落を中心に—— 中村では、村絵図から安養寺付近にかなり家

がまとまって描かれ、ここの集落の規模が大きかったこと、大門の集落の背後の小山塊の斜面に畑が広がっていたことが分る。また、村内を水路が南北に縦断しているが、これは大門の南の大井手井堰で取水した大井手井路とみて間違いないであろう。明細書によると、中村の水掛りは田一九町六反余のうち、井堰掛り一〇町七反余、池掛り八町九反弱であるから、大井手井路により字戸原・大門・宮田などにある田が灌漑され、大井手井路の背面にあたり、これの水を受けられない南西部の字長野あたりの田が、池掛りとなったものである。村絵図にはこの山塊の西斜面の麓に小さな溜池が二カ所描かれているが、到底これらで八町九反弱の田を灌漑することは不可能である。この池掛りの田は、これらの小溜池と南隣の間戸村のヤケヤマ池から小崎村の水路を経て灌漑されているものである。明治中期の地籍図をみると安養寺付近で集落が小さくなり、その周囲が開田されていることが分る(図3)。

上野村(図5)では近世に大きな変化が生じている。新池(荒田池)の築造である。明細書によれば、上野村の田三一町五反余のうち三〇町五反余が井堰掛りであったが、絵図に記されている面積から、この九割強の二七町九反余は、盆地底の条里型地割の部分の田で、鍋山井堰からの用水を受けていたと思われる。ところが、桂川の上流にあった沓掛村での取水と井堰の芝堰から赤土堰への改修により、用水の確保がいつそう困難になり、早害に悩まされるようになった。そのため、文政八年(一八二五)新池が築造され、以後は早害に悩むことはなくなった²¹。新池は鍋山井堰を補完するという役割にとどまったようである。村絵図と地籍図の比較からは、これにより新たにまとまって

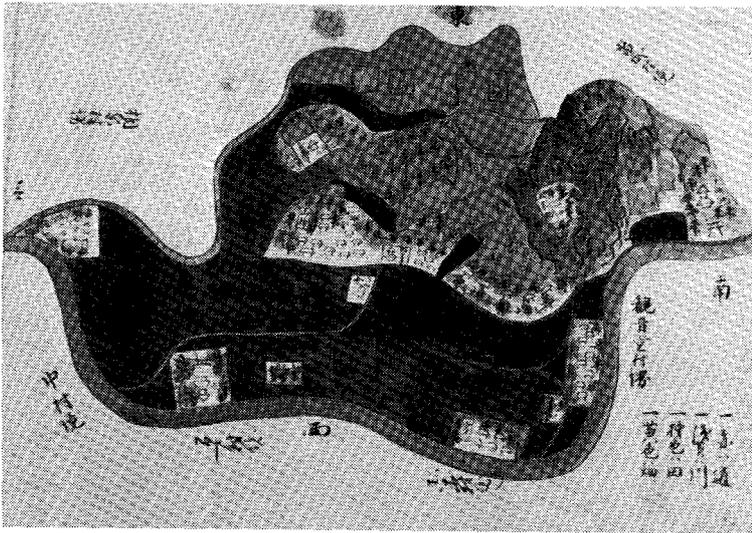


図5 上野村絵図〔豊後高田市田染支所蔵〕

開田したところはみられないようである。

桂川を挟んで上野村の西に接する真木村の近世村落景観をみると、上野村とはかなり様相を異にしている。集落が桂川左岸沿いと山麓部にみられ、絵図に表現されている限りにおいては、川沿いの集落の規模が大きいこと、明細書によると田が七町一反ほどしかなく、畑が一町四反弱と畑の占める割合が高いといったことが指摘できる。地籍図と比較してみると、真木村の北部や中央部で近世前期以降開田が進行したことがわかる。

つぎに、支谷沿いの観音堂・大曲両村についてみると、観音堂村では絵図によると、十数軒の家が描かれ、全体として疎塊村が形成されていたとみることができ、明治中期にかけて集落全体の縮小がみられる。大曲村では大曲川中流右岸の緩斜面にまとまって家が描かれ、一村一集落の集村であったことが分るが、明治中期にかけて若干規模の縮小がみられる一方、北の大曲川と小曲川の合流点付近に五〜六軒の宅地が出現し、一村二集落へと変化をみせている。より交通の便のよい谷の出口

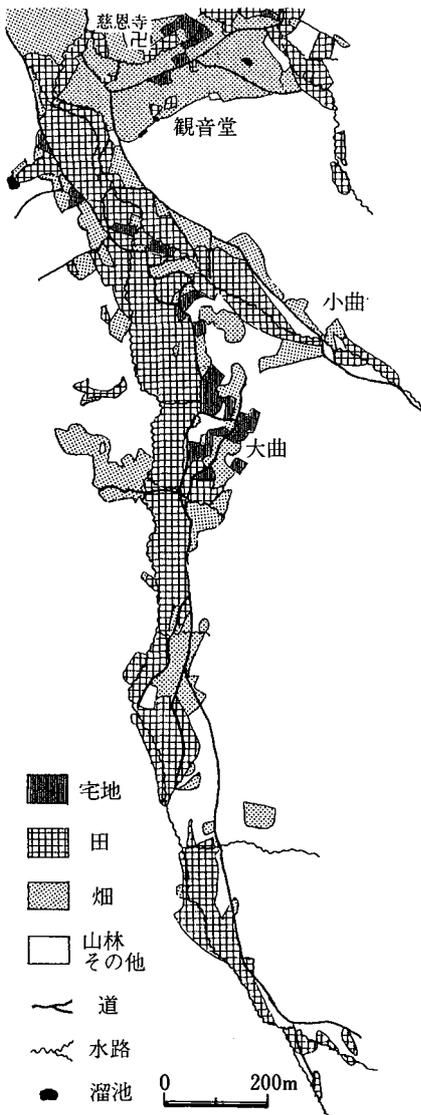


図6 観音堂・大曲両村の近代初頭の景観
 『豊後国田染荘の調査 I』による

へ向かっての集落の移動とみることができ、このような動きが必ずしもモータリゼーションによるものではなく、それ以前はかなり早い時期に見出されることは注目すべきことである。このような集落の分裂の背景には、共同的諸規制の弛緩などがあったものと考えられるが、いつごろからこのような集落の分裂が始まったのかは興味深いものがある。また、大曲村絵図には小支谷の斜面に短冊型の畑^⑤が描かれているが、これらは明治中期の地籍図にはみられないし、大曲川右岸の畑^⑥は明治中期にはかなり縮小し、谷底付近では一部で水田化がみられる(図6)。

小崎村の場合はどうであらう。村絵図をみると、小崎川の谷の奥に至るまで各所に多くの集落が描かれている。字上ノ原の集落だけが一〇軒以上の家が描かれ集村ないしは疎塊村的であり、それ以外の大半の集落が小村を思



図7 村絵図にみえる田染盆地内の溜池
〔25,000分の1地形図 両子山・若宮〕

わせる。明治中期にはこの小村のうちいくつかが姿を消し、現在までの間にはさらに小村が姿を消している。一方では、上ノ原の集落が北側の六郎園へと拡大し、小崎川の谷がその幅を広げる位置にある原の集落が軒数を増加させている。すなわち、この二集落を核にして集村化が進行しているといえよう。

(3) 近世における開発 田染組各村の村

絵図をみると、ほとんどの絵図に規模の差こそあれ溜池が描かれており、その多くが谷頭部をせき止めて造られたもので、近世の前期

においてすでに小支谷の開発がかなり進展していたことをうかがわせる(図7)。近世における田染盆地一六カ村の村高の推移をみると、正保四年(一六四七 郷帳)から明治四年(一八七二 旧高田領取調帳)までの間に三〇八二石余から三五二七石余へと四四五石余、一四・五%増加している。この間に国東郡全体では五三・三%も増加しているから、いかに田染地区の増加が少ないかが分る。石高の増加は土地生産性の向上と耕地の拡大によりもたらされるから、田染地区では土地生産性の向上がそれほどみられなかったのか、耕地の拡大があまりなかったことを意味する。

田染地区の各村の田畑の面積を元禄二年の明細書と明治九年の『大分県国東郡村誌』とで比べてみると(表1)、田

表1 田畑面積の変化

村名(現大字)		元禄2年 (a) (1689)	明治9年 (b) (1876)	(b)/(a)
嶺 崎	田	町反畝歩 60.9.0.03	町余 91	1.49
	畑	33.6.4.27	40	1.19
真 中	田	37.6.5.03 [※]	59	1.57
	畑	34.3.5.06 [※]	36	1.05
平 野	田	26.3.0.09	43	1.60
	畑	24.0.3.09	43	1.79
上 野	田	31.5.5.18	41	1.30
	畑	8.6.3.15	14	1.62
相 原	田	27.8.8.12	49	1.81
	畑	27.8.0.06	54	1.94
池 部	田	23.6.1.24	33	1.40
	畑	18.7.0.12	31	1.66
落	田	23.9.7.03 [※]	41	1.71
	畑	27.7.7.24 [※]	71	2.56
計	田	231.8.8.24 [※]	357	1.54
	畑	173.8.4.03 [※]	289	1.66

※推定

が一・五四倍、畑が一・六六倍になっており、国東郡全体の石高の増加にみあっているようであるが、『旧高旧領取調帳』は近世的な把握に基づくものであり、『大分県国東郡村誌』は地租改正にもなつて新たに近代的に把握されたものであるという史料の性格差があることに注意を要する。村ごとの耕地面積の変化に注意して表1をみると、盆地底の上野村や真中村などでは耕地面積の増大幅が小さく、谷あいに位置する相原村や落村では大きいという傾向が指摘できる。また、各村の家数・戸数の推移をみると(表2)、史料の性格や家数・戸数の内容の検討も必要であるが、各年次での村相互の比較や大まかな傾向は捉えることができよう。『小倉藩人畜改帳』の家数には隠居屋・庭屋・牛屋などが含まれるの

表2 田染地区各村の家数・戸数の推移

大字	村名	小倉藩人畜改帳 (1622)*	村明細書 (1689)**	国東郡村誌 (1876)***
嶺崎	横嶺	137	105	202(20)
	小崎	88 } 225	81 } 186	
真中	中戸	91	84	162(26)
	間真木山	69 } 160	21 } 180 75 }	
平野	陽平	23	29	134(17)
	蘭木	11	9	
	田野口	7	12	
	熊野	28 } 77	25 } 101	
	大曲	8	16	
	観音堂	-	10	
上相池	野原	60	51	63(7)
	部	101	84	133(16)
	落	81	80	96(13)
		135	-	175(15)
計		839	682	965(114)

* 隠居屋、牛小屋、庭屋などを含む家数

** 百姓家数

*** 社・寺・医者を含む戸数、()内はその内数

で、実際の戸数はかなり少なくなるものと思われるが、全体としてみると、横嶺・小崎・上野・池部の各村は家数・戸数の変化が少なく、陽平・蘭木・田野口・熊野・大曲・観音堂の各村は増加傾向にあることが分る。つまり、これらの表は、田染地区では既述のように近世前期の段階で、すでにかなり開発が進行しており、近世を通じて新たに開発できたのは、盆地底の水田を中心とする村々ではなく、主として桂川支流の小河谷沿いの村々であり、近世を通じて段々畑と棚田による開発が行われていたと解釈するのが妥当であろう。

五 中世の村落景観

(一) 「ヤシキ」地名からみた集落の分布

田染地区では四〇〇余の小字名のほかに、四〇〇余の小字内地名(シコナ)が採集でき、『田染荘史料』にも数百の地名がみえている。そこでまず、『田染荘史料集』で「○△ヤシキ」とありその場所が比定できるものおよび「ヤシキ」のつく地名の分布を示したのが図8である。「ヤシキ」のつく地名がすべて中世起源というわけではないが、ここでは資料が少ないので、中世に屋敷の存在した候補地として一応示した。このようにしてみると、中世の田染氏の居館のあった大字嶺崎の小崎川下流部にもっとも濃密に分布し、大字平野の西部、つまり旧陽平・菌木・田野口の各村の地域にはまったくみられず、また、大字池部・真中もわずか一カ所と希薄である。つぎに、中世の石造品の分布をみてみよう(図8)。鎌倉時代から南北朝時代にかけては全国的に石造品が多く造られた時期であるが、国東半島は仏の里ともいわれ、大分県下でも大野川中流域と並び磨崖仏・国東塔・五輪塔・宝篋印塔・板碑などの中世石造品の宝庫といわれている²⁶。これらの中世石造品は、基本的には人里離れた山中に造られるものではないので、その分布は付近に集落が存在したことを示唆していると理解できよう。そこで、この分布をみると、盆地底付近に濃密に分布し、落谷中流部にも多く、小崎川上流部と旧陽平・菌木・田野口の各村の地域は分布が希薄である。このようにみてくると、ヤシキ地名と中世石造品ともに分布の希薄な地域は、中世において集落の立地をあまりみなかった所であるといえそうである。ただし、小崎川上流部は、つぎにみるように中世の「名」関連地名が多くみられるにもかかわらず、中世石造品の分布が希薄であるが、このことはつぎのように解釈できる。すなわち、この小藤には南西の立

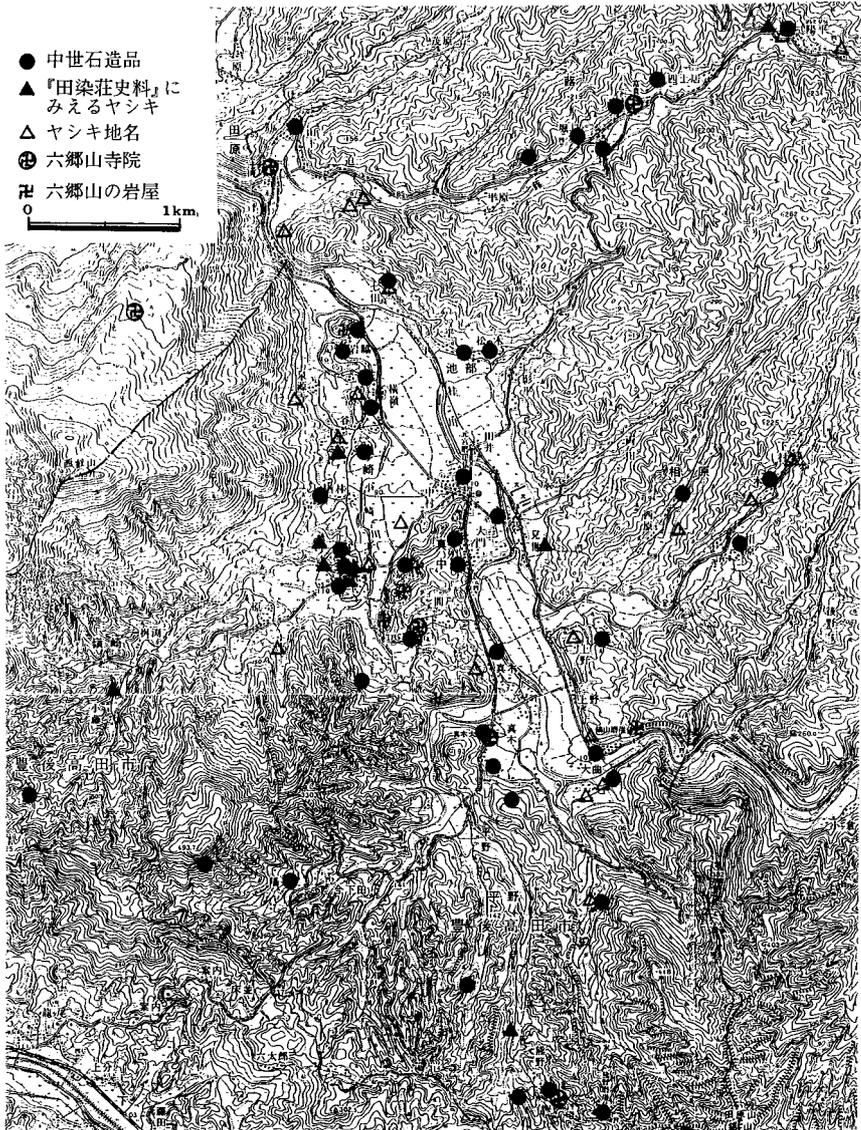


図8 中世石造品とヤシキ地名の分布
 [25,000分の1地形図 両子山、若宮、豊後高田、立石]

石から峠を越えて、一四世紀前半に伊予の河野氏が入り、さらに榑淵に入ったという伝承をもつが²⁵⁾、榑淵より下流部はすでに田染氏により開発されており、榑淵まででとどまったと思われ、伊予出身の河野氏は石造品を積極的製造する志向をもっていなかったために、小崎川上流部には中世石造品の分布が希薄なのではないだろうか。つまり、中世には開発が及ばなかったのは旧陽平・藪木・田野口の各村の地域であろう。

(二) 「名」関連地名からみた中世の開発状況

田染地区では前述のように非常に多数の小字および小字内地名が採集されたが、これらの中には『田染荘史料』にみえる地名あるいは類似の地名が多数みられる。そこで、名ごとにこれらの関連地名を示したのが図9である。盆地底周辺部および小崎川の流域、ついで路谷に多くの地名が残存し、逆に南西部の旧陽平・藪木・田野口の各村の地域および東部の旧相原村の西原川などの谷沿いではほとんど残っていないことが分る。盆地底の条里型地割の残る部分には、田は多いにもかかわらず名に関連する地名が少ないのも興味深い。図7の傾向と同様であるといえる。また、この図8をみると各名の関連地名が分散かつ錯綜しており、田染盆地における名田島の存在形態は、辺境地域に多い地域的なまとまりがみられず、畿内におけるのと同様に相互に入組み分散している。つぎに二・三の名について詳しくみてみよう。

(1) 糸永名 糸永という小字が路谷の入口にあり、ここの水田をイトナガ井堰が灌漑している。灌漑面積は三町九反であるが、路谷最大の井堰で、イトナガ井堰の灌漑範囲が糸永名の中心であったと考えられている²⁶⁾。この路谷を中心に「豊後国大田文案」(前掲)にみえる糸永名が比定されるが、路谷を村域とした路村の田地面積は近世前期には二四町前後であったと推定され(表1)、「糸永名三十町」を路谷のみに考えることは困難である。田染荘の成立

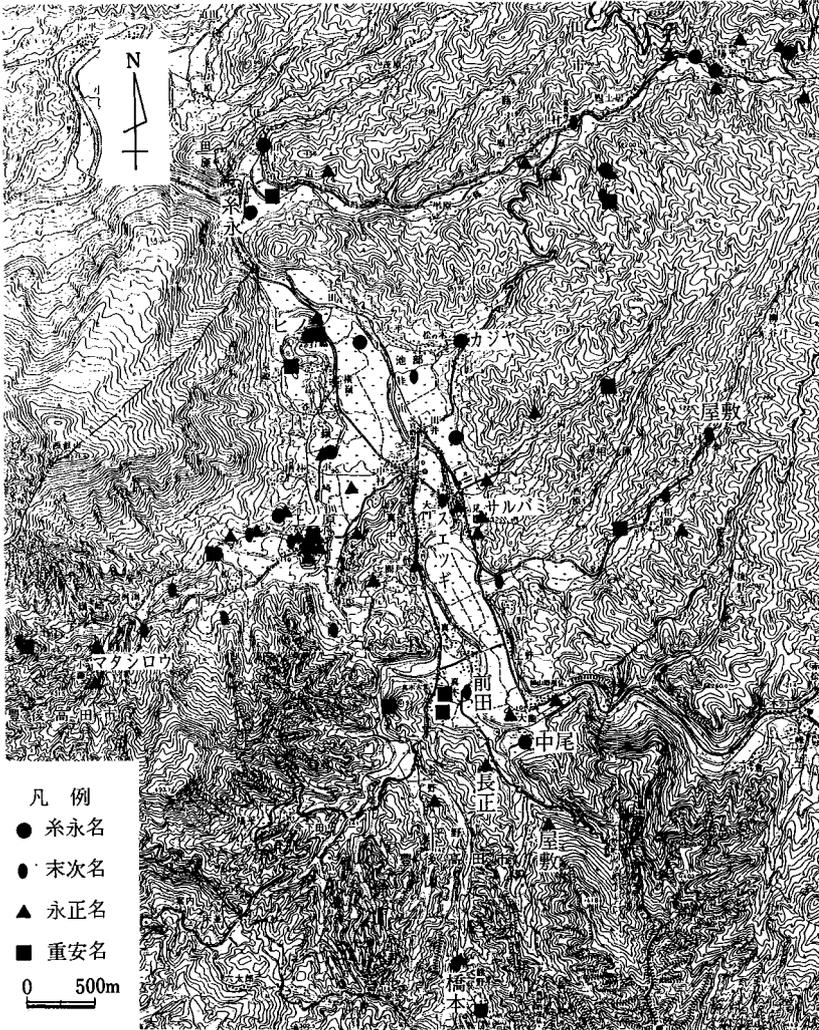


図9 名関連地名の分布

(漢字の地名は現在の小字名、片仮名は小字内地名等を示す)
 [25,000分の1地形図 両子山、若宮、豊後高田、立石]

は一一世紀前半にまで遡るものとされ^②、寛元三年(一二四五)の「大宮司宇佐公高切符案」^③によれば糸永保司の存在が知られ、糸永保が、国衛系官人により一二世紀前後に開発され、その後、田染荘に組み入れられたとみられている^④が、康永三年(一三四四)の「田染荘糸永名惣帳案」^⑤にみえる日野・中尾・かちや等の糸永名関連地名が大宇横嶺・平野・池部などにもみられ(図9)、路谷以外の地にも「糸永名三十町」の田地が存在していたことが分る。また、同「惣帳案」から糸永名では均等名編成がなされていたとされている^⑥。ところで、大字路の富貴寺の西側に字政所があり、空堀と土塁のある居館跡と、その背後に小規模な山城の遺構が残っている。その時期については明確にはなっていないが、この路政所が「田染荘政所」として整備されるなかで、防御的機能をもつ施設が一四世紀半ばから一五世紀はじめのころにかけて整備されたとみられている^⑦。

(2) 永正名 永正名の初見は貞応三年(一二二四)の「宇佐末利栗林売券」^⑧でかなり早くから存在していたことが分る。関連地名の分布は田染荘のかなり広範囲に及んでいるが、大字平野の大曲谷の入口に字長正があり、このあたりに永正名の中心の一つがあったと思われる、字屋敷には『田染荘史料』に多数みえる屋敷のいづれかがあったものと思われる。永亨三年(一四三一)の「田染荘内永正名大まかり取帳」^⑨によると大曲地区に一町余の田があったことがわかる。旧大曲村域では他の名関連の地名が見当らないことから、仮に大曲地区には永正名のみであったとすると、大曲村絵図の明細書によれば田は五町足らずあるから、近世前期との間で四町足らずの差があることになる。しかし、この史料は領家方の取り分を示したもので、この他にまだ田地があったとも考えられるから、実際の差はもっと少なくなるだろう。ところで、大曲地区には字屋敷に金高家墓地があり、そこには国東塔一基のほか多数の五輪塔がある。国東塔は永和元年(一三七五)の銘があり、先の史料より半世紀ほど遡る。少なくとも大曲谷の開発はこ

の時期までは遡らせてもよいであろう^⑧。このほか永正名では、「か」と「猿喰」・「又四郎」屋敷などの地名が残り、大体の位置比定ができ、それぞれ大字嶺崎の字上ノ原・大字相原の字サルバミ・大字嶺崎の字合畑に所在したと考えられる。

(3) 末次名 末次の初見は弘安二年(一二七九)の「大官司宇佐公有下文」^⑨で大字真中の字戸原にスエツギという地名がある。関連地名の分布から屋敷・田・畠が大字嶺崎の字上ノ原をはじめとする小崎川中流部に多くあつたうえで、ほかには、大字真中の字前田や大字相原の字屋敷、大字平野の字橋本等に田地や屋敷があつたとみられる。大字真中の字戸原のスエツギという地名のあるあたりは、既にみたように先史時代以来連綿と集落があつたと考えられ、末次名と関わりの深い屋敷の存在を考えてもよいであろう。

(三) 六郷山寺院と開発

鎌倉時代には国東半島では六郷山寺院の成立をみたようである^⑩、田染荘域にも多数の六郷山関係の寺院・寺院址・岩屋などがあり、これらと中世の田染地域の開発の關係についても一考を要する。六郷山全体に関する最も古く確実な史料は建武四年(一一三七)の「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」^⑪であるとされるが^⑫、これにより田染地区の六郷山のうち馬城山と今熊野寺の四至を示すつぎのようである。

- 一 馬城山 限東赤岩辻 限西ハエホシ嶽 限南六太郎美尾 限北光廣
- 一 今熊野寺 限東コケラ佛 限西赤岩 限南尾立 北稻積不動堂

これらの地名のうちエホシ嶽・六太郎(現速見郡山香町大字下)・稻積不動堂は位置が比定でき、赤岩・赤岩辻は、いわゆる耶馬溪層が侵食されて形成された田染耶馬のうち、露出部分が赤味を帯びた部分を形容していると考え

られ、赤岩を一カ所にみに特定するには問題なしとしないが、ここでは馬城山と今熊野寺の位置関係からしてほぼ特定できそうである。大字平野の字千道にアカイワなる地名があり、この赤岩・赤岩辻はこの背後の旧藪木村と旧田野口村との境界となっている部分を指すと考えられる。つまり、両寺は東西に境を接して田染盆地南部の山地部に四至を有していたことがわかる。田染地区にはこのほか多くの六郷山関係寺院があり、先の「注文案」などにみえるもので、その大体の位置が判明するものを示すと図8のようになる。このような寺院による開発についてはまだ明らかではないが、この「注文案」には、例えば「一高山拂々料田畠山野等四至以下、云々」とあり、かつて国東半島でみられたナギノ（焼畑）や苧畑との関連を想起させる。つまり、この拂とは焼畑に関連して山野を刈り払ったことを示しているのではないかとも思われるのである²⁸。このほか富貴寺のように寄進された寺領²⁹を有する寺院もあった。このようにみえると、中世寺院と田染盆地の開発についてもまだ考察すべき課題は多いといえる。

六 おわりに

中世において豊後国田染荘であった田染盆地（現大分県豊後高田市田染地区）を対象地域として、古代以来の景観の変遷をみてきた。近年の圃場整備事業の進展は、田染盆地のような山間の小盆地にも押し寄せ、モーターゼイションとともに近代における村落景観変貌の二大要因となっているといえる。このようななかで、古くからの景観の名残りを多くとどめているとみられる田染盆地の景観は、大きく変化しつつある。したがって、今日こうして田染盆地の景観を描出することによって、少しでも景観の記録としての役割を果たすことができればと思わずにはいられない。ところで、中世の田染盆地の景観について振り返ってみると、小崎川の流域が密度高く利用されていたことに気が

つく。これは、大字嶺崎の字上ノ原には、鎌倉時代から江戸時代初期まで田染荘を基盤に、在地領主として活動した田染氏の拠点があり、史料にも多くみえることと、多くの小字内地名が採集されたことにもよるであろうが、その他の要因があるかどうかさらに検討を要するであろう。また、小稿では、田染盆地の景観変遷をまとめるにあたって、中世の田染盆地の村落景観をできるだけ具体的に描出しようと考えたが、集落や耕地を中心とする近世の村落景観は、田染組村絵図の残存によりかなり具体的に描出することができたのに対して、中世・古代の景観となると村絵図のようなヴィジュアルなる資料がなく、余りに地名に頼りながらの作業で、皮相な景観の描出に終始し、また、豊富な中世史料の活用も不十分であるために具体的な景観像としては足らざる点の多いことを痛感している。中世の開発は田染荘を舞台にした政治史的な動きをぬきにしては十分明らかにできないと思われる。今後は、史料の十分な活用をはかり、開発の背後にある政治史的な動きなどにも配慮しながら、さらに具体的な景観の復原をめざしたい。

〈付記〉

小稿は大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が中心となって行なった豊後国田染荘調査の成果に依るところ大である。同館の研究員諸兄をはじめ筆者とともに調査を行なった調査員の方々、常に適切で有益な助言・示唆を与えて下さった調査委員の諸先生、さらに調査に御協力下さった豊後高田市田染地区の皆様深く感謝いたします。

注・参考文献

- (1) 木村 礎『日本村落史』弘文堂 一九七八、四頁
- (2) たとえば地理学の側からは、谷岡武雄『平野の開発』古今書院、一九六四。高重 進『古代・中世の耕地と集落』大明堂、一九七五。金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂、一九八五などを、歴史学の側からは、島田次郎編『日

- 本中世村落史の研究」吉川弘文館、一九六六。 木村 礎・高島緑雄編『耕地と集落の歴史―香取社領村落の中世と近世―』文雅堂銀行研究社、一九六九。 永原慶二『日本中世社会構造の研究』岩波書店、一九七三などを挙げる事ができる。
- (3) 拙稿「近世村落景観の復原―地籍図と村絵図―」(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館編・発行『豊後国田染荘の調査Ⅰ』一九八六)一九六―二一七頁、および「豊後国田染荘の近世村落景観」(水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圈』大明堂、一九八六)三一九―三三一頁
- (4) 七〇〇点以上の田染荘関係史料があるとされ(渡辺澄夫「荘園史研究における田染荘の位置」(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館編・発行『研究紀要Ⅳ』一九八七)二六頁、そのうちの六〇一点が「豊後国田染荘・田原別符史料」に収められている。
- (5) 前掲(4)、「豊後国田染荘・田原別符史料」(以下「田染荘史料」と略記)三三号
- (6) 「田染荘史料」五号
- (7) 「田染荘史料」四二号
- (8) 大分県西国東郡田染村役場編・発行『田染村志』一九三二、四―二一頁。 豊田寛三「近世田染の政治支配」(前掲(3)、「豊後国田染荘の調査Ⅰ」一九八六)二七〇―二七五頁など
- (9) 宮内克己「考古資料からみた田染盆地(1)先史(縄文・古墳時代)」(前掲(3)、「豊後国田染荘の調査Ⅰ」所収)一五―三一頁によるところが大きい。記して謝意を表したい。
- (10) 賀川光夫「縄文文化の発展と地域性(11)九州東南部」(鎌木義昌編『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房、一九六五)二七五―二七六頁
- (11) 坂本嘉弘「縄文時代の発展」(大分県総務部総務課編『大分県史 先史篇Ⅰ』大分県、一九八三)一六八―一七三頁
- (12) 後藤一重「考古学的調査の概要」(豊後高田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ 上野条里遺跡)豊後高田市教育委員会、一九八五)二―一五頁
- (13) 前掲(9) 三〇頁
- (14) 前掲(12) 一三頁

- (15) 後藤一重「考古学資料からみた田染盆地(2)条里遺構と集落」(前掲(3))『豊後国田染荘の調査Ⅰ』所収) 三三―三七頁
- (16) 大分地方気象台編『大分県の気候誌』大分県、一九七三、一四―一五頁
- (17) 段上達雄「村落と信仰」(前掲(3))『豊後国田染荘の調査Ⅰ』所収) 一四七―一四九頁
- (18) 本稿でいう村落景観とは、集落(狭義・人間の居住区、すなわち住居とその付属建造物およびそれらの付属地)、耕地、水路、道路、林野などの村落を構成する可視的で具体的なものである。
- (19) 前掲(1) 四頁
- (20) 本項での村は、近世の藩政村をさす。
- (21) 村絵図のみつかっていないのは蔭村と菊山村の二村で、後者は寛文九年(一六六九)以降は延岡藩領で、村絵図は作成されなかったと考えられる。前者は「田染輪中九カ村」に含まれず、作成されなかった可能性もある。
- (22) 海老澤衷「広域水田遺跡資料としての近世村絵図」(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館編・発行『豊後国田染荘Ⅱ』一九八四) 一八―二五頁。筆者もこの村絵図の記載内容について寺院の創建年代をはじめとして多角的に検討を行ったが、その結果は元禄二年の状況を示すとする考えと整合的であった(拙稿「近世村落景観の復原―地籍図と村絵図―」前掲(3))『豊後国田染荘の調査Ⅰ』所収) 一九六―二二七頁
- (23) 前掲(8)『田染村志』六二―六三頁
- (24) 後藤宗俊「ある(村落)考―豊後高田市大曲地区の場合」大分県地方史一〇八、一九八三、一二二頁
- (25) このように短冊型で表現された畑は、ナギノあるいは苅畑と考えられる(拙稿「近世村落景観の復原―地籍図と村絵図―」前掲(3))『豊後国田染荘の調査Ⅰ』所収) 二〇一―二〇二頁
- (26) 調査により明らかとなった中世石造品は九八件、五〇一基にのぼり、そのうちの四八基が造立の年紀のある在銘品であった(渡辺文雄「六郷山と中世石造文化」、前掲(3))『豊後国田染荘の調査Ⅰ』所収) 九三頁
- (27) 前掲(8)『田染村志』一三〇―一三二頁。なお、小藤の河野氏は戦国期(天正ころか)の文書を有し、その中に「尾藤名」というのがみえ、小藤の谷の開発は少なくとも戦国期にまでさかのぼりうる(河野常好文書二「鎮方書状」(大分県教育委員会編『大分県史料二六』大分県中世文書研究会、一九七四、所収) 一一頁
- (28) 海老澤衷「灌漑体制の変遷」(前掲(3))『豊後国田染荘の調査Ⅰ』所収) 二二二頁

- (29) 渡辺澄夫「解説」(前掲(4)『田染荘史料』所収) 五三四頁
- (30) 『田染荘史料』一七号
- (31) 海老澤衷「富貴寺の歴史的環境」(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館編・発行『富貴寺』一九八四) 三二頁
- (32) 『田染荘史料』一四〇号
- (33) 前掲(29) 五四三頁
- (34) 真野和夫「考古資料からみた田染盆地 (4)城館と中世寺院」(前掲(3)『豊後国田染荘の調査Ⅰ』所収) 六三〜六六頁
- (35) 『田染荘史料』一一号
- (36) 『田染荘史料』二八四号
- (37) 前掲(24) 二四〜二八頁
- (38) 『田染荘史料』三五号
- (39) 小泊立矢「鎌倉時代の文化 旧仏教の動き」(大分県総務部総務課編『大分県史 中世篇Ⅰ』大分県、一九八二) 四七〇
 頁四七三頁
- (40) 『田染荘史料』一一八号
- (41) 前掲(31) 三三〜三四頁
- (42) 豊後高田市大字長岩屋の字一ノ払はこれに関連する地名と思われる。
- (43) 『田染荘史料』一〇号